
籠の中に咲く

旭日葉乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

籠の中に咲く

【Nコード】

N1722N

【作者名】

旭日葉乃

【あらすじ】

花魁が暮らす花町、吉原遊郭。そこに太夫の凧は居た。いつもと変わらない生活。そんな凧の前に一人の男、義風が現れた。義風は凧を外の世界へと連れ出す。凧が焦がれた、自由な世界。何も縛られない世界。次第に凧と義風は惹かれ合っていく。しかし、凧は花魁。自由を望む事は許されない。そんな中、凧に身請けの話が持ちかけられる。それは、昔から凧がお世話になっている、隣町の若旦那、源。源からの身請けは断りきれない。断れば、吉原の仲間が危なくなる。考え抜いた末、凧は――。

1話

鮮やかな着物や簪、紅を白粉を身につけ京の町を練り歩く花魁たち。皆、涼しい顔で歩いている。

「ほーお。これまたすごいなあ……」

誰かが花魁たちを見て呟いた。その呟きに答えるよう、先頭に立つものが唇に弧を描いた。彼女たちを見て、鼻を伸ばす者もいると思えば、嫌うように一瞥する者もいる。様々だ。

「もう少しでありんす」

一人の太夫が他の花魁に声を掛けた。多分、その声に他の花魁は頷き、表情が柔らかくなる。吉原遊郭に着けば、皆崩れ落ちるように畳に横たわった。

「これっ！ 止めんか！ 花魁たるものなにやってんだい、お客が居ないからつてだらけるんじゃないよ！」

一括を入れるのはこの吉原遊郭で最も威厳がある忘八の藤。

「まったく、少しは太夫のお凧をみなわらんか！」

涼しげに腕を組み皆を見ている。

「はい」

ちらほら聞えて来る声にお凧は口に着物の裾をあて、くすくすと笑った。

「もう、そんなところで良いでありんす。この者たちも、この暑さと日頃のお客のお世話で参っているでありんすから……なあ？」

花魁たちに同意を求めれば、全員頷く。

「はあ。仕方が無いね。午の刻まで休憩だ。好きにおし」

そう言う否や、着物を翻しさつさと去っていた。

「お凧さん、ありがとー」

わらわらと近寄り笑顔を見せる家族達。ここでは、皆を家族と呼んでいる。暖かい、かけがえ替えの無い存在。凧はホッと心の中でため息を吐いた。

「なあーにいつものことでありんす。さ、今のうちに休養を取るでありんす…私達^{わっち}は健康でなけりやいけないからなあ…」
扇で口元を隠し天井を仰ぎ見る。

風鈴の音が心地よく吉原の玄関に響く。

「はあ…私も休むかえ」

よつこらしよと腰を上げ、凧は自分の部屋へと戻っていく。今、休まないと晩にある仕事に体がついていなくなる。それに、凧は太夫である。

襖を開け、文鎮と文を取り出し文字を綴る。すらすらと筆を動かしていく凧。その文はお客に出すもの。何通も重なり有る文にため息を吐くことなく、凧は読む。休みが与えることに文を書く。これも客を逃がさないために過ぎないが、凧は心の内で楽しんでいる。お客とのやり取りが、世間話でも楽しく感じる。それは凧の心優しい性格が出ているからなのか。

そういえば、と思い顔を文から上げる。

「また、来ていたでありんすなあ。あの男」

男の顔を思い浮かべ、声を漏らす。そしてまた、来るのだろうか。そう、凧が気になっているのはお客の男。たしか、新選組の隊士と言ったか。

他の客にお酌をして居ると背中に視線があると思い、振り向くと男の姿があつたのを覚えている。彼は直ぐ目を逸らし、お酒を飲んでた。今日も来るのか？ と思うが来れば嬉しい。それは花魁となのか、女としてか分らない。

襖が開き、凧は首を擡^{もた}げ見る。

「姉さま、夕餉^{ゆうけ}の準備が出来たでありんす。皆がお待ちでありんす」
禿^{かむろ}の糸だ。糸は凧の世話係。

「そう。わかつたでありんす…」

くずしていた着物をさっと直し、襖を閉める。糸は凧の後ろに続く。廊下を渡り、菊の間へと進んで行く。そんな中、禿の糸を罵る声がひそひそと囁かれる。

「まあーた、糸はお凜さんにくっ付いて…私の方が余程、お凜さんに相応しいりんすのに」

「はあ？ 私よ私っ！ 私でありんす」

「違うでりんす。私よっ…」

「本当に、邪魔よね…あの子」

そんなこと分かっているのにと糸は思う。自分だって、凜と吊り合わないことぐらい知っている。

ぎゃあ、ぎゃあ騒ぐ散茶を横目でちらりと一瞥し、凜は足と止める。

「…騒がしいりんす。此処は吉原、町の女子のように喋り歩いて何になるでありんす？ 私たちは花魁りんす。恥という言葉が分からんりんすか？

糸はおまんたちより、賢い。相応しいなどいう前に己の腕を磨くほうが余程、良いりんす」

糸への冷やかしの声も無くなり、その場は静かになった。

しゃらんと簪が鳴る。その音に合わせ凜は背を向ける。糸は腰を曲げ頭を下げ、凜の後を追った。

「…よかつたりんすか？ あんなこと…」

「糸は何も気にしなくて良いでありんす」

「でも…」

凜は糸の目の高さまでしゃがみ、おかっぱの糸の髪を撫でた。

「糸は糸でありんす。あんな散茶の言葉に耳を傾けなくて良いでありんす…誰かがなんと言おうと、私は糸じゃないと嫌や」

小さな頬を赤く染め、はいっと頷いた。

夕餉が用意されている菊の間に足を踏み入れる。

「お凜さんっ！」

そう転びそうな勢いで、やって来たのは格子のお美江。

「どうしたりんす？ 顔でも傷つけたら…」

「やっと客取れるようになったありんす！ それを一番にお凜さん

に言いたくて…」

「初取りでありんすか…。頑張るりんす、相手が良いといいありんすなあ」

16歳の頃を思い出す。

「さ、食べないと…腹が減っては戦が出来ぬというから」

「はいっ」

箸を持ち、米を口に含む。

食事を済ましたところで、お藤が入って来た。

「仕事だよ、呼び出しは直ぐ、外へ。座敷持は準備を」

お藤と入れ替わるように、呼び出し、座敷持と呼ばれた者たちはバタバタと行き来する。

「慌しいりんすねえ…」

扇を開き扇ぐ。

「…呼び出しのところでいこうかえ」

凜は立ち上がり、呼び出しがしている吉原の入り口へと向かう。

重い三枚歯下駄さんまいはげたを履き、外へと顔を出す。

1話（後書き）

【忘八】遊女屋の当主。

【禿】遊女の身の回りの世話、雑用をする10歳前後の少女。

【太夫】高級遊女、吉原に数人しか居ない。

【格子】太夫に準ずる遊女。

【座敷持】客を迎える座敷を持つている遊女。禿が付いている。

【呼び出し】禿・新造を従わせ客を茶屋に迎える遊女。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722n/>

籠の中に咲く

2010年10月30日05時09分発行